

ニュースレター ぶどうの木

第25号

2025年2月



ご卒業
おめでとうございます！



「わたしはぶどうの木、あなたがたはその枝である。

人がわたしにつながっており、わたしもその人につながっていれば、その人は豊かに実を結ぶ。」

(ヨハネ福音書15章5節)

理事長 Sr. 永田 淑子

卒業なさる皆様、おめでとうございます！

「卒業」という言葉は、何らかの業を終えることを意味します。しかし、英語では卒業式のことを、何故か Commencement つまり「開始」という真逆の言葉で表します。

過去を向いているか、未来を向いているかの違いであるとも云えるでしょう。苦勞をした過去の学びの期間がやっと終わったという安堵の喜びで見るか、または、さあ、これから始まるという期待と責任の自覚の気持ちで見るかの違いと言ってもよいかもしれません。

皆様お一人お一人の心の中はどうでしょうか。

社会人としてスタートするということは、これからの人生は自分が責任を持たなければならない、ということの意味します。自分の言動の結果は、自分が責任を持たなければならないのです。親でも先生でもありません。考えてみれば、これは当然なことなのですが、大変なことです。

でも、それこそやりがいのある仕事ではないのでしょうか？これまでご自分が苦勞して積み上げてきたことを足場に、人々のために尽くすことができるのです。そして更にご自分を豊かに成長させることができるでしょう。

そのような過程の中で、あなたが

一回りも二回りも大きく成長していくことが、育ててくださったご両親に対する最大のご恩返しにもなるでしょう。

未知の社会に飛び出ていくことは、期待と同時に何らかの不安もあるものです。それは当然なことです。それを乗り越えて、人は次第に成長していきます。

私は藤女子大学英文学科を卒業してすぐにマリア院に入会しました。そしてシスターとしての3年間の養成期間が終わると、上智大学の大学院で学ぶように言われました。正直に申しますと、最初の2年間はよく泣いたものです。2年間の修士課程を終えて、これで勉学を終わらせていただきたい、と頼みましたが、修道会の長上から更に3年間の博士課程に進むように言われました。試験に落ちたら行かなくてもよいと言われて、博士課程の入学試験の日に出かけましたら、「試験は受けなくてもよいです」と事務の方に言われて、ガッカリしました。でも、そこで覚悟を決め、後の3年間は非常に多くを学ぶ機会となりました。よい恩師や友人たちとの出会いがあり、人間として少しは成長できたかなと思える感謝の3年間となりました。

勉強を終えて札幌に戻り、1年間は短大の非常勤の他に、私の

希望で中高の授業も非常勤でさせていただきました。しばらくの間は、教卓の前で緊張して脚が震えていましたので、一所懸命に出席をとりながら、何とか気持ちを落ち着けたものです。

2年目に短大英文科の専任教員となりましたが、やっと授業にも慣れたその年の秋、体を壊してしまい、5年間つらい時期を体験しました。子供の時から病氣らしい病氣の経験がなかった私は、この病氣を恵みの体験として考え、これが与えられたことに感謝できました。この経験があるのとないのでは、私という人間の幅が全く違うように思います。すべては恵みを秘めているのです。

皆さんも、これからの人生において何が待っているのか誰もわかりません。喜び、満足、感謝などもたくさんあるでしょうが、挫折、落胆、失敗なども経験するかもしれません。

いかなる時にも、「希望」を失わないでください！人生は「希望の巡礼者」として歩んでゆくべきものです。お元気に飛び立ってください。



2025 聖年

希望の巡礼者

JUBILEE 2025 Peregrinantes in Spem

2025年は、カトリック教会において「聖年」と呼ばれる年で、これは聖書の旧約聖書に由来する歴史的な記念の年です。旧約聖書レビ記25章の中で命じられている安息の年で、7年毎に土地を休ませる安息年が7回終わった翌年、つまり第50年目の年を指し、ヨベルの年と呼んでいます。ヨベルというのは「雄牛の角」を意味し、この年が始まる時に雄牛の角笛を響かせることから、ヨベルの年と呼ばれました。

ヨベルの年には畑を休ませ、49年目は7年毎の安息年にあたりますので、50年目のヨベルの年には2年続きの休耕年となります。農作物無しの2年です！レビ記25章に次のように書かれています。

「7年目に種も蒔いてはならない。収穫もしてはならないとすれば、どうして食べていけるだろうか」とあなたたちは言うか。わたしは6年目にあなたたちのために祝福を与え、その年に3年分の収穫を与える。」(レビ記25章20-21節)

神のはからいへの絶対的な信頼が求められている規定なのです。

ヨベルの年について種々の定めがありましたが、現代の目で見ても非常に画期的な定めが与えられました。その中から幾つか紹介します。

「もし同胞が貧しく、自分で生計を立てることができないときは、寄留者ないし滞在者を助けるようにその人を助け、共に生活できるようにしなさい。」(レビ記25章35節)

「もし同胞が貧しく、あなたに身売りしたならば、その人をあなたの奴隷として働かせてはならない。雇い人が滞在者として共に住まわせ、ヨベルの年まであなたのもとで働かせよ。その時がくれば、その人もその子供も、あなたのもとを離れて、家族の元に帰り、先祖伝来の所有地の返却を受けることができる。」(レビ記25章39-40節)

このヨベルの年という旧約時代の掟に基づいて、キリスト教は50年毎の聖年を設け、さらに後には25年毎に改められた聖年となって、今日に至っています。紀元2000年には大聖年として祝われました。この時には当時のヨハネ・パウロ二世教皇が、「多くの国々の将来に深刻な脅威となっている累積債務の帳消し、もしくは大幅削減」を求めました。

今年、フランシスコ教皇はこの路線に沿って、富裕国は貧困国にエコロジカルな債務を負っていることを認識して、返済困難な国々の債務を免除することを提唱し、更に融資と債務という悪循環を避けるために、新しい金融制度を構築する必要があると述べています。すなわち、「軍事費の一定の割合を飢餓撲滅と持続可能な開発を促して気候変動に立ち向かえるようにするため、最貧国での教育活動を支援する世界基金設立に充ててください」と訴えているのです。

世界の明るい未来を創り出すためには、子どもたちへの教育を確実に行うことが絶対に必要です。教育を満足に受けられない子どもたちが、今も世界中に溢れています。紛争国・最貧国などで、初等教育からも遠ざけられている多くの子どもたちは、将来どうなるのでしょうか？その国の将来もどうなるのでしょうか？

皆さんは、非常に恵まれている方たちです。初等教育、中等教育ばかりか、高等教育まで受けることができました。多く与えられた人には、責任があるということを忘れないで、希望と使命感をもって歩み出してください。

Nobless Oblige という言葉を心に抱いて。

教皇フランシスコのX(Twitter)より

The Word of the Lord cannot remain only a fine abstract idea or stir up only a passing emotion. Scripture invites us to change our gaze and allow our hearts to be transformed into the image of the heart of Christ.

卒業感謝ミサへお誘い

卒業なさる皆様のために、一緒に感謝のミサをお捧げします。どうぞ多数ご参加ください。お世話になった方々、特にご両親・ご家族、先生方、職員の方々、そして友人たちなど、すべての方々への感謝を込めて祈りましょう。

日時 3月18日(火) 13:00

北16条キャンパス 聖マリア聖堂